

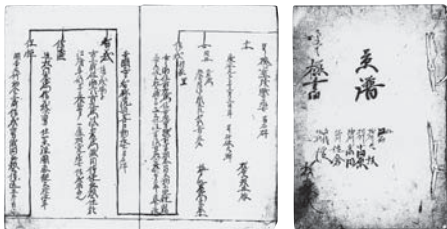
第一章 近松の生涯 ① 鯖江での少年時代

一、おいたち

文豪近松門左衛門ぶんごう ちかまつもんざ えもんの本名は杉森信盛すぎもり のぶもり。承応二年（一六五三）、越前えちぜん（現在の福井県）の吉江藩士・杉森信義のぶよしの次男として誕生しました。小さい頃の呼び名は次郎じろ吉きちといました。

父の信義は、第三代福井藩主・松平忠昌まつひらただまさに仕えていました。正保二年（一六四五）忠昌が亡くなり、三男の福松君ふくまつぎみが吉江藩主となると、福松君に従って、吉江藩士となりました。その時、福松君はまだ五歳（数え年で六歳）だったので、彼が元服げんがく（男子が成人となったことを祝す儀式）するまではそのまま福井に住んでいたようです。

次郎吉（後の近松）は、その間に生まれています。



杉森家系譜（杉森唯智氏所蔵）

承応元年（一六五二）、十二歳（数え年で十三歳）で元服した福松君は昌親まさちかと名のり、明暦元年（一六五五）、四十七名の家来と一緒に吉江の地にやってきました。その時に杉森一家も吉江に移ってきたと思われます。近松二歳（数え年で三歳）の時でした。

それから十数年間、近松は吉江藩士の子としてこの鯖江で過ごすのです。父信義のりただかは禄高（年俸）三百石の中級以上の武士でしたので、裕福な家庭であったと思われます。

近松には、兄・市三郎いちざぶろう（後は智義ともよしと名のる）と、弟・金三郎きんざぶろう（後は伊恒これつねと名のる）がいました。他に二人の弟がいたとも言われます。また母は、福井藩医であった岡本おかもと為竹いちなくの娘・喜里きりとされていますが、はっきりとはしていません。



吉江町図(松平文庫 松平宗紀氏所蔵 福井県立図書館保管)

二、福井藩と吉江藩

時は、徳川氏の時代です。慶長五年（一六〇〇）、徳川家康の次男・結城秀康が六十八万石の初代福井藩主となります。そして、二代は秀康の長男・忠直、三代は秀康の次男・忠昌と続きます。

正保二年（一六四五）、忠昌が亡くなり、長男・光通が第四代藩主となると、次男・昌勝（幼名仙菊）に松岡五万石、三男・昌親（幼名福松）に吉江二万五千石が分け与えられました。こうして、福井藩の分家として、鯖江に吉江藩が誕生することになったのです。



旧吉江城下のたたずまい

館やかたは現在の鯖江市吉江町に建てられ、領地は丹生郡にゅうぐん二十六ヶ村、坂井郡さかいぐん十ヶ村の他全四十四村でした。

延宝二年えんぽう（一六七四）、第四代福井藩主・

光通の死により、昌親が第五代を継ぐことになって吉江藩はなくなります。吉江藩の存続はわずか三十年足らずでした。

廃藩後、館やかた、侍屋敷等さむらいやしきはすべて福井に移転されましたが、現在の杉本町西光寺さいこうじの表門は吉江藩邸の表御門を移したものとされています。また、街道を挟はさんで七つの曲がり角があります。また、七曲りななまが、城下町の面影おもかげを今に残しています。

三、育ったまち吉江

ところで、近松が少年時代を過ごした吉江とはどんな町だったのでしょうか。

吉江町は、吉江藩が成立してできた町です。侍屋敷を中心に、新町・西町・本町・東町・柳町などの町人町が形成されました。

昔このあたりは、葦

ど 茂る

こ か い

がついたと言われるとおり、日野川、大谷の池などの豊かな水と、経ヶ嶽や春慶寺山などの豊かな自然に恵まれていました。日野川を下ると、当時にぎわいを見せていた三国湊に通じ、近松もその光景を目にしたことがあるかもしれません。

また、吉江と隣接した丹生郡西田中（現在の朝日町西田中）には、室町時代から栄えていた幸若舞があります。吉江藩でも、幸若舞は催されただろうと考えられ、父とともに舞に触れる機会もあったでしょう。そして、後の近松に何らかの影響を与えたに違いありません。



大江の幸若舞（鯖江市所蔵）

四、幸若舞

幸若舞とは軍記物語を鼓に合わせて謡い、扇で手のひらを打ちながら舞うものです。

室町時代、桃井幸若丸直詮が、『平家物語』などの軍記物に節をつけて語ったのがはじまりと言われています。晴やかな謡いとおもむき深い舞が、見る人を魅了し、やがて天皇に認められると、桃井家は菊桐の紋章を許されました。その後、越前の西田中に住み、現在の丹生郡朝日町を中心とした領地と幸若の名を

賜りました。

織田おだ信長のぶながをはじめ多くの武士に愛され、保護を受けつつ芸を伝えましたが、明治めいじ維新いしんとともに滅び、その一派である大江おおえの幸若だけが、福岡県山門郡瀬高町大江さんもんぐんせだかちようで継承けいしょうされています。また、現在の朝日町では、子孫により関係資料が残されています。

幸若舞は、浄瑠璃や歌舞伎をはじめ、後の芸能や文学に影響を与えたといわれています。

五、京都への旅立ち

杉森一家が、吉江藩主・昌親に伴い吉江に移ってから十数年の後、父・信義は突然藩を離れます。その時期ははっきりわかっていませんが、杉森本家（石川県加賀市）に残されている親類書（今の戸籍みたいなもの）の控えに、寛文四年（一六六四）、信義が吉江藩にいたことが記されていますから、それ以降のことになります。

ところで、信義の長男智義は織田長頼に仕え、三男伊恒は織田長頼の侍医平井自安の養子（要安、後岡本一抱を名のり高名な医者となります。）となつていますが、近松は仕官の機会に恵まれず、父母と他の弟とともに京都に移ることになります。当時京都は庶民を中心とした文化面において活発な町でした。

父の浪人という経験が、近松の将来にとっては、思いがけない道を開くきっかけとなったのです。